



オピニオン
 進化からシニアを考える(3/9)
 SCE・Net 中安 一雄

O-41
 発行日：
 2026年3月14日

本稿は「進化からシニアを考える(2/9)」に続くものです。

5) 日本人の生き方

生き方の基本といっても広い。今回は日本人の生き方で次世代の参考になるものを取り上げてみたい。それがいのち－ヒトが絶滅せずに平和や善に向かうこと－を考えるヒントになると思うからである。

SCE-netの「窓」で松村眞氏が考察されておられる(松村眞、日本の長所：起源と伝承方法、窓 R50、2018)。それを参考に現代の日本と開国期の日本の長所を外国人の目で比べ、それをヒントに次世代に伝えるべき生き方を考えてみたい。(外国人の目を参考にするのは、岡目八目でその方が分かり易いからである。外国人の指摘が正しいかどうかということではなく、いのちや次世代に伝えたいことは何か、という視点から考えてみたい。なお、以下で日本人とは普遍的な意味ではなく、筆者のイメージする日本人であることをお断りしておく。)

表-3で開国期と現代を比べてみた。開国期の人々は明るくのびのびと暮らしていた

表-3 開国期と現代の日本人

開国期の人々*	現代の人々**
(定住外国人の感想)	(滞在外国人・海外経験日本人の感想)
陽気である 親しみやすい(笑顔がある) 簡素である(部屋に物が無い) 精神的な豊かさがある 開け広げである(鍵がない) 安全である 子供を大切にする 礼節にとむ、嘘をつく(交渉に際し) 衛生的である、蚤虱が多い 仕事に時間感覚がない(のんびりしている) 職人仕事には妥協がない(レベルが高い)	清潔、質素 親切、優しい、協調性 礼儀正しい、他人を尊重、気配り、道徳心 秩序がある、従順、共同体帰属意識 迷惑を避ける、マナー 盗まない 自立心が強い、団結力 勤勉、義務感、完璧志向 謙虚、冷静、義理堅い 温和(争わない)、周囲に配慮 自己犠牲、名誉重視、恥文化 自然愛護 子供を可愛がる

* 渡辺京二、逝きし世の面影、平凡社ライブラリー、2005等を参考

** 松村眞、日本の長所：起源と伝承方法、SCEnet-窓 R-50、2018 より抜粋

ように思える。表-4は何もかもあべこべなことに外国人が驚いた事柄である。あべこべでも社会は成り立つ。日本文化は世界でも類例のない特異な文化と言われている（S.ハンチントン、文明の衝突と21世紀の日本、集英社新書、2000）。世界には多様性があり、こうでなければならぬということは少ない。また多様性は進化の原動力でもある。外国のものがすべて良いのではなく、いろいろな生き方があるのである。

日本人には、外国のものを取り入れて自分のものにする特技がある。しかしそれとともに、自分のものを捨てることを気にしない資質もある。開国期に来日した多くの外国人は、当時の日本人の明るく大らかな生活を驚きの目で見ている。しかし同時に、

表-4 あべこべの社会*

	日 本	欧 米
家	履物を脱いで上がる	靴のまま部屋に入る
戸ドア	引き戸が多い 家の外へ向かって開ける	ドアが多い 家の中へ向かって開ける
履物	下駄は左右同じ 足袋は左右違う	靴は左右違う 靴下は左右同じ
服	男女とも左前	男は左前、女は右前
手招き	手の平を下に向け、指を曲げる	手の平を上に向け、指を曲げる
鉋**、鋸**	引いて削る、切る	押して削る、切る
本**	右から開く 上から下・右から左へ読む	左から開く 左から右へ読む

* L.フロイス、ヨーロッパ文化と日本文化、岩波文庫、1991に詳しい

** E.S.モース、日本その日その日、講談社学術文庫、2013、p24

日本人が自分たちのものを大切にせず、変えていくことを心配している。その心配が現実になり、現代の日本人が忙しさに追われ大らかさがなくなったとするなら、それは日本人の捨てる資質に原因があるように思われる。

ハリス（日米修好通商条約の全権大使）の評価

この土地は貧困で、住民はいずれも豊かでなく、ただ生活するだけで精いっぱい、装飾的なものに目をむける余裕がないからである。それでも人々は楽しく暮らしており、食べたいだけは食べ、着物にも困ってはいない。それに、家庭は清潔で、日当たりもよくて気持ちが良い。世界のいかなる地方においても、労働者の社会で下田におけるよりも良い生活を送っているところはあるまい。（1856.11.5）（ハリス、日本滞在記・中、岩波文庫、1954、p108。以下、下線は筆者による、以下同じ）

ヒュースケン（ハリスの通訳）の心配

この進歩は本当に進歩なのか？この文明はほんとうにお前のための文明なのか？この国の人々の質朴な習俗とともに、その飾り気のなさを私は賛美する。この国

土のゆたかさを見、いたるところに満ちている子供たちの嬉しい笑い声を聞き、そして、どこにも悲惨なものを見いだすことができなかつた私には、おお、神よ、この幸福な情景がいまや終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの悪徳を持ち込もうとしているように思われてならないのである。(1857.12.7) (ヒューズケン、日本日記、岩波文庫、1989、p221)

ベルツ (日本へ医学を根付かせた医師・東大医学部教師) の見聞

新日本の人々にとっては常に、自己の古い文化の真に合理的なものよりも、どんなに不合理でも新しい制度をほめてもらう方が、はるかに大きい関心事なのです。(1876.6.26) (ベルツ、ベルツの日記・上、岩波文庫、1979、p47)

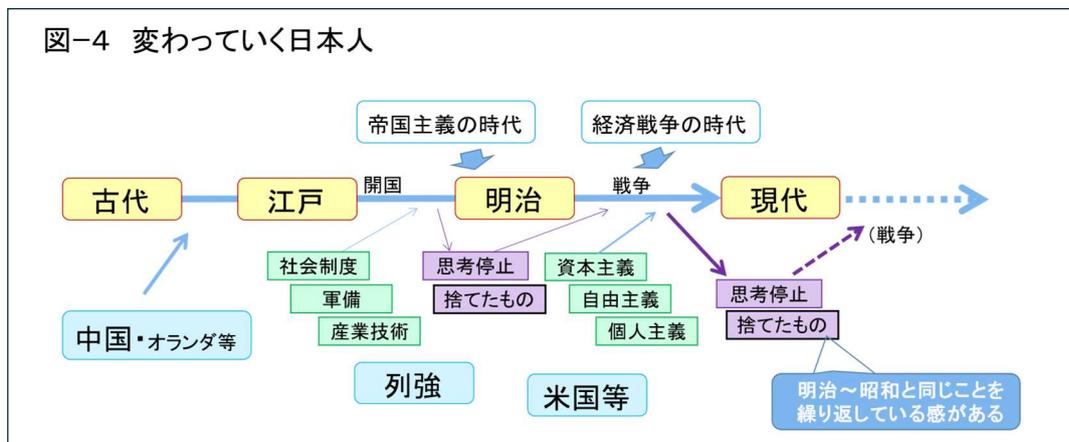
開国期の外国人と同じ経験をした日本人にローマ教会枢機卿の菊地功氏がいる。菊地氏は1980~90年代にガーナでの宣教経験を持つ。電気や水道も無いガーナの村で菊地氏が見たものは明るく生活する人々であった。菊地氏は不思議に思い、なぜなのかと人々に聞いた。その答えは「ガーナマジックを持っているからですよ」だった。では、ガーナマジックとは何か。それは「困ったことがあっても誰かが必ず助けてくれると確信している、それがどんなに苦しくても生きる希望を生み出している」ということだった(NHK・TV「こころの時代」2026.1.4)。幸福感と生活の利便性には相関がなく、幸福感は別のところから来る。開国期の日本人も同じようなものを持っていたのであろう。先進国では、知性は進むが感性と霊性が劣化するのではないだろうか。

1873年に22歳で来日し、以降32年間日本に滞在し帝国大学教授などを歴任して、日本紹介の著書があるB.H.チェンバレン(英国)は、その著書で、こう言っている。

「古い日本は死んでしまった。そして、その代わりに若い日本の世の中になった。……国民の性格は依然としてそのままであり、本質的には少しも変化を示していないのである。種々の事情によって新しい水路に片寄っていったという、それだけのことである。」(B. H. チェンバレン、日本事物誌1、東洋文庫、1969、p14)

日本の開国期、世界は帝国主義の時代であり、強国と思われた清が列強に侵略され、当時の日本人はいつ清のように列強に侵略されるか、という恐怖の下にあった。したがって、旧来のものを捨てて富国強兵により日本を列強並みの国とし、開国時の不平等条約を改定することが急務であった。しかし、捨てることは思考停止が起こっていた結果であり、その傾向は現代にも残っている。現代、世界が軍国主義*に進んでいる中で、日本は憲法に明記された平和主義を捨て軍国主義の仲間入りをすることに懸命である。これはまさに開国期と同じ状況である(図-4)。このことに気付いていないとすれば、日本人は今もまた思考停止なのだろう。チェンバレンは日本人の変わらない面も見ていた。本稿では人類が生き残るのに役立つ日本人の良い面など、次世代に

伝えたいものを整理してみたい。（*軍隊で国を守ること。後述8参照。）



6) 日本人の生き方—その基盤

開国期、外国人に好印象を与えた日本人の生き方の根底には、次のようなものがあると思われる。以下、これらについて考えてみる。

1. 自然に育まれて生きる
2. 感謝して生きる
3. おてんとうさまは見ている（「人を超えた存在」と共に生きる）
4. 和を尊ぶ
5. 良いものは取り入れ、改善して自分のものにする（最善を追求する）
6. 「すなお」に生きる
7. 「分からないまま」「ありのまま」という生き方（あいまいさを残す）
8. 大切にしたい日本語
9. 足るを知る、無制限に求め続けない
10. 神事という生き方

6)-1 自然に育まれて生きる

人は自然の中に入るとなぜかホッとすること。これは自然に育まれて生きる感覚から来る。日本人には自然と対立したり、自然を自分好みに変えたりする発想がない。人類の多くが自然を管理支配しようとする中であって、日本人は、自然に育まれてというか自然と共に考えたようである。このような日本文化は貴重な存在である。

自然に育まれる感覚があるので、和風と言われる庭や家などのデザインは、自然と調和するものが好まれる。家は全て自然の素材から作られる。自然から得られる安堵感は自然の無い人工空間からは得られない。人本来の居場所が自然の中にあると感じているのである。自然の中では「見えない存在」と共鳴しあい安心が得られるのである。しかし共鳴能力が低下すると、この安堵感、ホッとすることの気持ちは得られなくなる。

「育まれて生きる」とは変化する自然を受け入れることである。自然を自分の思い通

りにしようとは思わないのである。自然があって人が存在するのである。晴れの天気
を感謝するだけでなく、雨も恵みの雨として感謝して受け入れる。しかし、すべてを
盲目的に受け入れるのではなく、激しい雨に備えて堤防や遊水地を作る。良く考えて
臨機応変に対処するのである。

変化を受け入れることは、自然や物事は変わっていくものであるという感覚から来
る。この感覚は、小野小町の

花の色は うつりにけりな いたずらに わが身世にふる ながめせしまに
から、いろは歌、枕草子、徒然草、方丈記、平家物語へと続く日本人の根底に流れる感
覚となっている。日本人の自然に育まれて生きる感覚には、以下のような特長がある。

- ① 受け入れるけれども、改善すべきことは改善する
- ② 変化に対して柔軟に対応する：これは計画通りに進まなくても、また、事故や災
害が起きても慌てずに対処する、変化への心構え（覚悟）を持つことでもある
- ③ 落ち込んでも辛抱でき、良い時でも有頂天にならない（変わっていくものだから）
- ④ 簡素な生活が身につく（変わっていくものだから不要なものに拘らない）
- ⑤ 変化－四季－を楽しむという美的感覚にも影響し、生活にリズムができる
育まれるという感覚は恩恵を感じることであり、感謝へとつながる。

6)-2 感謝して生きる

感謝して生きることは、自然の恩恵を感じながら生活することである。自然を管理
しようとする思想からは、感謝は出てこない。自然に育まれる感覚から、陽射しにも
雨にも、食べ物や日々の生活の中でも恩恵を感じて、感謝が生れ、生活がのびやかな
ものとなる。

後述するように日本の言葉には感謝の気持ちを表す言葉が満ちている。英語の
「thank you」は文字通り相手 you に対する感謝だが、日本語の「ありがたい」は相手
だけでなく、もっと広い感謝である。無事であることは当たり前のことではない、有
り難いという感覚であり、生きていること自体に対する感謝までも含まれ、人を超え
た存在(次項)に関係している。

6)-3 おてんとうさまは見ている （「人を超えた存在」と共に生きる）

人は、目に見えないものと共鳴する能力を獲得し、目に見えないものを感じるこ
とで、動物からヒトへと進化した。人は誰でも「人を超えた存在」を直感している。その
直感している「人を超えた存在」を日本人は「おてんとうさま」と呼んだ。

「おてんとうさま」は道教の「お天道様」から来ているが、元は素朴な太陽信仰であ
る。今日でも日本人はご来光や初日の出を尊ぶ。当初、おてんとうさまは崇める存在だ
った。それが神道の神、儒教の天、仏教の大日如来などと習合し変化して日本的なもの
となった。日本人の生活には「人を超えた存在」が「おてんとうさま」として入ってい
る（その意識がないくらいに潜在化しているが）。

日本人の「人を超えた存在」の理解の仕方には次のような特長がある。

- ① 漠然と認識する：「人を超えた存在」はどのようなものかと追求しない。ご来光をなぜ尊ぶのかと理屈を考えない。明らかにしないまま受け入れる。
- ② 「人を超えた存在」は「善」であるとした：人は誰でも平和を願っている。その願いは「人を超えた存在」やご先祖様の「人の平和を願うところ」との共鳴から来ることを、理屈は分からないものの感じ取っていた。
- ③ 「おてんとうさまは見ている（守られている）」という感覚：これはおてんとうさまが人を監視しているというのではなく、温かく見守ってくださる、という感覚である。似たものに「おてんとうさまは笑っている」という言葉がある。これは人を馬鹿にして笑っているというのではなく、人が苦勞しているのを見て、おてんとうさまには解決方法が分かっているから、「もう少し視野を広く持てば解決策がすぐそばにあることが分かるのに、視野が狭いばかりに気付かず苦勞している、しょうがないな～」と思いやりと嘆きの気持ちをもって見守り苦笑している、ということである。守護神とはこのようなことに起源があるのだろう。この感覚は、見られて恥ずかしくない生活をしよう、人が見ていなくてもすべきことはする、してはいけないことはしない、人の役にたとう、迷惑は掛けまいなどの心掛けになる。また、守られているから大丈夫という安心感も生まれる。

おてんとうさまと神道

おてんとうさまは神道の神さまではなく、祀る社もないが、それは日本人の宗教観を良く表している。

神道には教義がない。布教活動をしていない。教勢を拡大しようとしめない。神主がない神社も多い。日本人に神道を信仰しているという感覚を持つ人は少ない。しかし、参拝はしている。また、神道の祭りや年中行事は大昔より連綿と引き継がれているし、建築では地鎮祭や竣工式が行われる。日本人の生活には神さまが共にいるのである。

宗教の教義というものは人間が考え出したものである。考えを整理することは有益だが、人は一人ひとり考えが違うから、いろいろな教義が生まれ、さらに自説に拘るとトラブルの元にもなる。教義のどれが「正しい」のかは人間には分からない。信仰者は自分のところが共鳴する教義を受け入れる。人の好きな音楽は人それぞれであるのと同じである。

本来の宗教は理屈や教義ではなく、「人を超える存在」と共に生きる生活そのものなのではなかろうか。

このような基盤から日本人の謙虚さ、丁寧な性格、礼儀正しさ、正直、勤勉さ、最善を尽くす姿勢、差別の少ない考え方、といった資質が形作られ、開国期の外国人が驚いた「明るく大らかな人々の生活」が生まれたのであろう。ガーナマジックも同じように思われる。現在、そのような生活が失われつつあるのならば、それを取り戻すにはこれらの生活の基盤を取り戻し、伝承しなければならない。

(つづく)